

懺悔と雨乞い

——気候変動時代におけるインドネシア・イスラームの一側面——

中 鉢 夏 輝*

身の周りの地球温暖化

インドネシアの首都ジャカルタ近郊の都市デボックにある、筆者が住む下宿先の近所に小さな洗濯屋がある。筆者は洗濯屋の主人(30代男性)と毎日のように「暑いね」という挨拶をお互いに交わす。2023年10月初頭のある日、洗濯屋の主人は「ずっと雨が降らないね。普通じゃない」と述べた。「どういうことか」と聞き返すと「グローバル・ウォーミング(Global Warming)さ」と笑って答えた。筆者はこの英単語を突然耳にして、面食らってしまった。彼とは地球温暖化についての話をすることがなかった。

インドネシアには乾季と雨季の2つの季節がある。おおむね、乾季は4月から9月頃まで、雨季は10月から3月頃まで続く。しかし、2023年は例年どおりとはいかなかった。インドネシア気象気候地球物理庁(BMKG: Badan Meteorologi, Klimatologi, dan Geofisika)は、エルニーニョ現象に伴い、インドネシア各地で雨季の到来が例年よりも遅れていることを発表した[Dwi Herlambang Ade Putra 2023]。メディアでは天気の変異が頻繁に報じられ、早魃や熱中症への対策が呼びかけられていた。洗濯屋の主

人は、このような情報をテレビなどで見聞きたり、天気の変異を肌感覚で察知したりしていたのだろう。

インドネシアにおいて地球温暖化に伴って生じる気候変動問題は一種の流行といえる。この問題はイスラームとも無関係ではない。政府や企業のみならず、宗教指導者やイスラーム団体までもが気候変動問題を重視する姿勢をみせている。一部のムスリムは、気候変動が信仰上の問題であると主張している。さらに、インドネシアでは寄進財を利用した植林活動など、イスラームの仕組みを適用した環境保護活動も盛んに実践されている。筆者はこうした新たな宗教実践を展開するムスリムの動向を調査している。そのなかで、気候変動によってムスリムの信仰のあり方はどのように変化しているのか、ということも気になっていた。そう思っていた矢先、雨乞い礼拝が行なわれるというニュースを見聞きした。

雨乞い礼拝の手順

早魃の発生や乾季の長期化を受けて、2023年10月、インドネシア各地で「サラ・イステイスカー」(*salat istisqa*)と呼

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ばれる雨乞い礼拝が行なわれた。¹⁾この雨乞い礼拝は、預言者ムハンマドの時代からイスラーム世界全体で行なわれてきた伝統的な礼拝の一種である。イスラームの開祖である預言者ムハンマドが神から受けた啓示をまとめた、聖典クルアーンには雨乞い礼拝について詳しい記載はない。一方で、預言者ムハンマドの言行を記録したハディースには、信徒から雨不足の窮状を訴えられた預言者ムハンマドが雨乞い礼拝を行なう様子が記されている。

実際に雨乞い礼拝はどのように行なわれているのだろうか。10月のある日、筆者は南ジャカルタに行き、インドネシアの代表的なイスラーム団体であるムハマディアが運営する高校を訪問した。この高校の隣にあるグラウンドで雨乞い礼拝が開催されることを、高校が運営するインスタグラムのアカウントを通じて知ったからである。そのアカウントでは、近隣住民に対して礼拝への参加が呼びかけられていた。午前7時半から学生たちがざろざろとグラウンドにやってきては、男子生徒が前方、女子生徒が後方に整列して座っていた。近隣住民も列のなかに入っていく。集団の最前列中央に座るイマーム（宗教指導者）の声が、スピーカーを通じてグラウンド中に響いた。イマームはアラビア語で、ゆっくりとしたリズムで「被造物の主よ、赦しを請います。数々の過ちの赦しを請います」と2、3度繰り返し、「主よ、私の知識を深め、私の所為を受け入れてください。私に糧を授

け、私の心からの後悔をお赦しください」と唱えた。8時を過ぎるまで、イマームはこのイスティグファール（*istighfar*、神に赦しを請うこと）という唱念を何度も繰り返した。マイクを手を持った教員が「さあ、みんなで声をだせ」と生徒たちにイスティグファールの合唱を促していた。生徒たちは胡座座りでじっとするか、隣の生徒にちょっかいをだすなどして、礼拝の開始を待っていた。8時頃に一度、教員から指名された一部の生徒が寄進材として少額の紙幣や小銭を回収していた。

8時10分を過ぎた頃、生徒が揃うと、スーツを着た教員が生徒たちの前で挨拶をして、学校にペットボトルの水を寄付した近隣住民への謝辞を述べた。そして、イマームによるイスティグファールの唱和が再び始まった。唱和を終えると、先ほどの教員が雨乞い礼拝の説明を始めた。彼は「雨乞い礼拝とは猛暑が長引く今日の異常な気象が終わるよう、神



写真1 雨乞い礼拝のために整列する生徒たち
立っている生徒は寄進財を回収している（筆者撮影）。

1) インドネシア語の名称についてはアルファベット・イタリック体表記で付記する。

に祈ることである」と、「祈る」の部分強調しながら話した。そして、高校の職員や教員も列に混ざり、皆が西の方角に向かって礼拝動作を始めた。大勢が同時に、直立礼、屈折礼、平伏礼、座礼に至る1サイクルを2度行なう。職員のひとりに聞くと、「グラウンドに千人以上はいる」と言っていた。最後に、ハティーブ（説教師、30代男性）による説教が行なわれ、8時40分頃に雨乞い礼拝の一連の催しは終了した。

雨乞い礼拝の論理

雨乞い礼拝はなぜ行なわれるのか。人と神との関係に着目した説明では、雨乞い礼拝は自らの信仰心にかけて祈願することによって、降雨や農産物など神からの現世的利益を期待する行為とされる。ハティーブは説教のなかで「地上の全ての物事はアッラーの意志と無関係ではない。私たちはこうした神とのつながりを自覚し、信仰心を深め、示さなければならない」と説明していた。さらに、ハティーブは「私たちは、生態系のバランスを維持し、地上の動植物を管理することを求められている。これは地上の代理人 (*khalifah di bumi*) としての責務である」と、人間には神に代わって自然を管理する責任があり、その成否も神からの評価に関わることを示した。

次第に、ハティーブの説教は熱を帯びてきた。「今日、私たちの手によって大地や海が破壊されている。私たちは自然環境の適切な管理をしているのか」と問いかけ、「この乾季の機会をつかって、イスティグファールを通じ

て神に懺悔をしよう。特に、私たちの生活の維持に不可欠な物事に対する不適切な態度について」と聴衆に自省を促した。このように、ハティーブは雨が降らないという気候の異常に関連づけて、人々の態度を戒めていた。

雨乞い礼拝を結節点として、現代の気候変動と人々の信仰心が結びつけられているのは、このムハマディヤ傘下の高校に限った話ではない。筆者が住むデボックでは、ムハンマド・イドリス市長が市役所職員たちと大集会場で雨乞い礼拝を行ない、市民に路上でのごみの焼却を止めるよう呼びかけたという [Laika Afifa 2023]。また、近頃深刻な旱魃の被害を受けていた西部ジャワ州・チアンジュールでも雨乞い礼拝が行なわれ、2024年2月に実施される大統領選挙の大統領候補であるガンジャル・プラノウォ中部ジャワ州知事もこの礼拝に参加した [Gilang Akbar Prambadi 2023]。ガンジャルは、チアンジュールにあるボンドック・プサントレン（イスラーム寄宿学校）の広場で宗教指導者や学生とともに礼拝を行ない、気候変動に対処するために再生可能エネルギーやグリーン・エコノミーを定着させる重要性を説いたのだという。

それぞれの事例から、雨乞い礼拝の背後にあるさまざまな意図が汲み取れる。ただし、人間による自然への誤った介入があり、悪い影響が起きているという前提がいずれにも共有されている。従来、雨が降るか降らないか、そして異常気象の発生は人智を超えた現象であった。しかし、気候変動時代とも称される現代では、気候変動のリスク回避のため

に人間側の対応が重視されている。雨乞い礼拝は、自然を媒介にした人と神の交換関係に加えて、人から自然への介入の現状や責任を浮き彫りにする機会となっている。

神学的・生態学的罪と雨乞い礼拝

気候変動とムスリム個人による宗教的義務の履行とを直接的に結びつけたハティープの論調は特異な例ではない。2023年10月12日、ムハマディヤのホームページ上で「雨乞い礼拝における説教―生態学的罪の放棄」という説教用の論考が発表された [Ilham Ibrahim 2023]。そこでは、旱魃とは賭博や酩酊などの不義の帰結であるとともに、汚染や森林伐採による結果でもあると主張されている。つまり、旱魃は宗教的義務を履行しないムスリムへの警告として神によって発せられる一方で、自然環境との関係を崩壊させる人間によって生じる両義的な現象なのである。論考のなかでは、宗教的義務の不履行が神学的罪として、自然破壊が生態学的罪として紹介されている。そして、罪を回避するために神の赦しを請うこと、節水やプラスチックごみの削減といった個人ができる小さな取り組みの遂行が勧告された。

今日のインドネシアにおいて、雨乞い礼拝はムスリムが自らの信仰心を顧みて、さらには自然への関わり方についても自省する機会となっている。このような役割をもつ雨乞い礼拝は、地球温暖化のような大きな問題において人為的原因が強調されるいまだからこそ、今後も繰り返し行なわれるだろう。ただし、雨乞い礼拝を行なうことで、たとえばチ

アンジュールでの旱魃やジャカルタやデボックでの汚染といった環境・気候問題の被害を直接受ける人々に対してどれだけの効果がもたらされるのだろうか。多くの地域で行なわれるだけに、個々人の宗教的な意識や行動だけでなく、社会のなかで生じている環境負荷に対する効果までも期待してしまう。それを見つけるためには、ムスリムたちの信仰上の変化と、かれらを取り巻く社会環境の変化とを相互に、地道に追っていくことが求められるだろう。

引用文献

- Dwi Herlambang Ade Putra. 2023 (September 8). Kapan Musim Hujan Tiba? Ini Prediksi Lengkap BMKG, *Badan Meteorologi, Klimatologi, dan Geofisika*. <<https://www.bmkg.go.id/press-release/?p=kap-musim-hujan-tiba-ini-prediksi-lengkap-bmkg&tag=press-release&lang=ID>> (2023年10月31日)
- Gilang Akbar Prambadi. 2023 (October 5). Datang ke Ponpes Al-Ittihad Cianjur, Ganjar Ikut Sholat Istisqa Bareng Kiai dan Santri, *Republika*. <<https://news.republika.co.id/berita/s22ae0456/datang-ke-ponpes-alittihad-cianjur-ganjar-ikut-sholat-istisqa-bareng-kiai-dan-santri>> (2023年10月31日)
- Ilham Ibrahim. 2023 (October 12). Khutbah Istisqa': Meninggalkan Dosa-dosa Ekologis, *Muhammadiyah*. <<https://muhammadiyah.or.id/khutbah-istisqa-meninggalkan-dosa-dosa-ekologis/>> (2023年10月31日)
- Laika Afifa. 2023 (October 4). Depok Prays for Rain Amid Prolonged Dry Season, *Tempo* (English version). <<https://en.tempo.co/read/1779758/depok-prays-for-rain-amid-prolonged-dry-season#:~:text=TEMPO.CO%2C%20Depok%20%2D%20Depok,importance%20of%20water%20for%20life>> (2023年10月31日)